

(3) 5歳児の保育内容

本調査では5歳児を取り上げ、その保育内容についてアンケート調査を行った。以下、アンケート調査の結果に基づいて、合同保育実施園の5歳児の保育内容についてみていくこととする。

① 5歳児クラスの保育の特色

5歳児クラスの保育の特色について尋ねたところ（複数回答）、図12の結果を得た。それぞれの施設種別ごとに70%以上の回答を得たものは次の項目である。

合同保育実施園では「異年齢の子どもとの関わりを重視している」75.0%（12園）、「自然とふれあうことを重視している」75.0%（12園）となっている。

保育所では、「一日全体を保育の単位として、一貫した流れで保育を行っている」78.3%（18園）、「一人一人が自分の好きな遊びをじっくりできることを重視している」78.3%（18園）、「保育園児が寂しさを感じず、くつろげるように配慮している」78.3%（18園）、「自然とふれあうことを重視している」78.3%（18園）、となった。

幼稚園では、「自然とふれあうことを重視している」95.8%（23園）、「一人一人が自分の好きな遊びをじっくりできることを重視している」83.3%（20園）、「自然体験を重視して、動物や草花を育てるなどしている」83.3%（20園）、「一日全体を保育の単位として、一貫した流れで保育を行っている」75.0%（18園）となった。

このうち、最も重視していることは、3施設とも「一人一人が自分の好きな遊びをじっくりできることを重視している」であった。ただし、保育所では第二位となっている「一貫した流れ」（保育所の30.4%、）については、合同保育実施園では12.5%（2園）にとどまっている。

② 早朝の保育

合同保育実施園における幼稚園児の登園終了時刻は最小値8.5時、最大値9.5時で、平均9.1時となっている。

午前8時の時点で5歳児と一緒に活動している子どもの数を尋ねたところ、平均人数は合同保育実施園23.6人、保育所9.1人、幼稚園9.1人である。合同保育実施園の子どもの数が最も多い。この時の保育者の平均数は、合同保育実施園2.6人（うち常勤保育者1.7人）、保育所は1.5人（うち常勤保育者1.2人）、幼稚園は1.1人（うち常勤保育者0.7人）である。保育者1人あたりの子どもの数は、合同保育実施園9.1人、保育所6.1人、幼稚園8.3人で、この点でも合同保育実施園が最も多く、幼稚園、保育所の順となっている。

早朝保育の保育形態は図13のとおりである。「大半が自由遊び」がいずれの施設でも最も多いが、数値には差異があり、合同保育実施園81.3%（13園）、保育所91.3%（21園）、幼稚園66.7%（16園）となっている。合同保育実施園では次に「自由遊びと一斉保育が半々」12.5%（2園）となっているが、保育所・幼稚園ではこれは0であった。ただし、保育所では他の2つの施設（合同保育実施園・幼稚園）では0であった「大半が一斉保育」が4.3%（1園）あった。

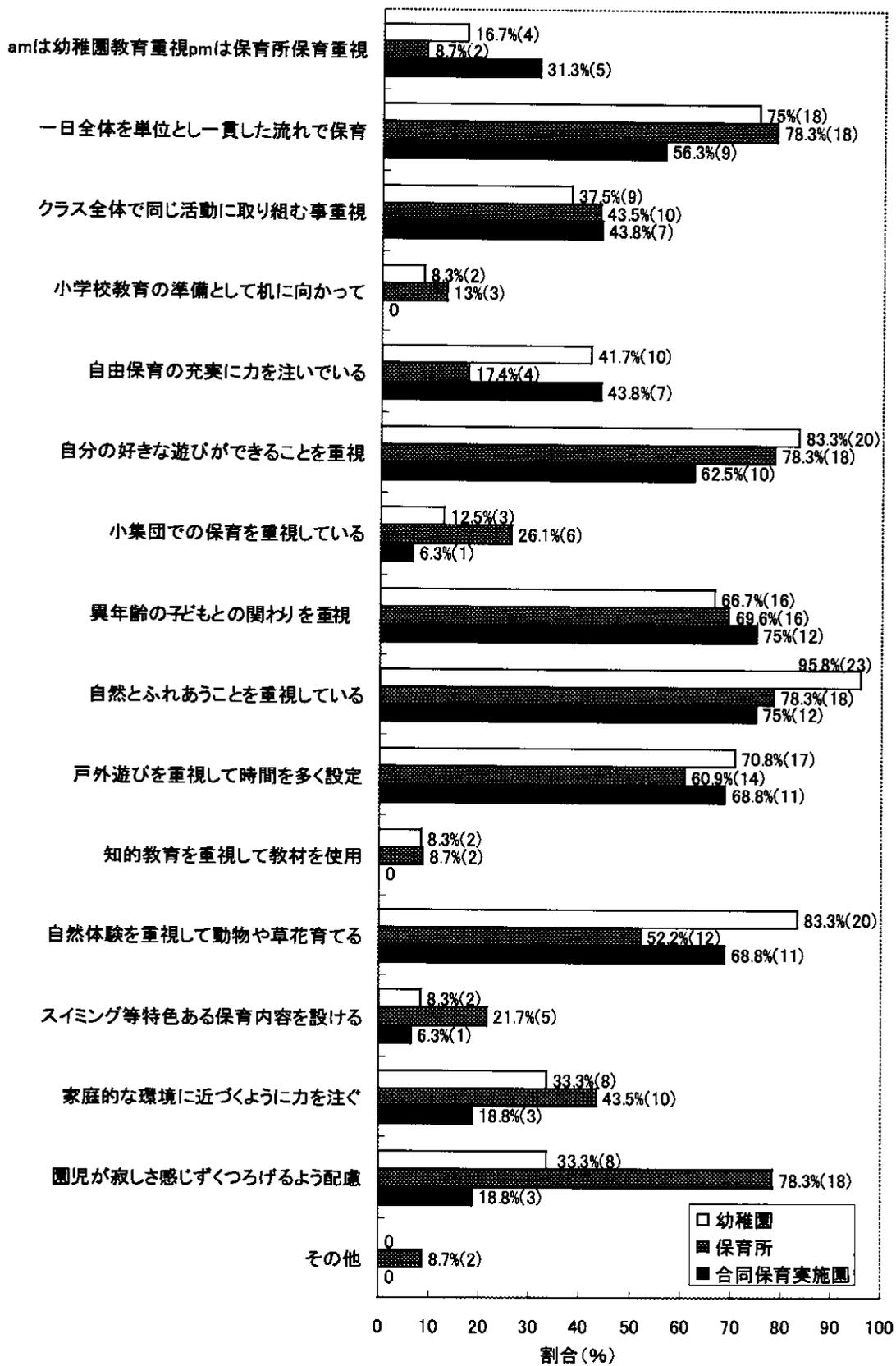


図12 5歳児クラスの保育の特色 (複数回答)

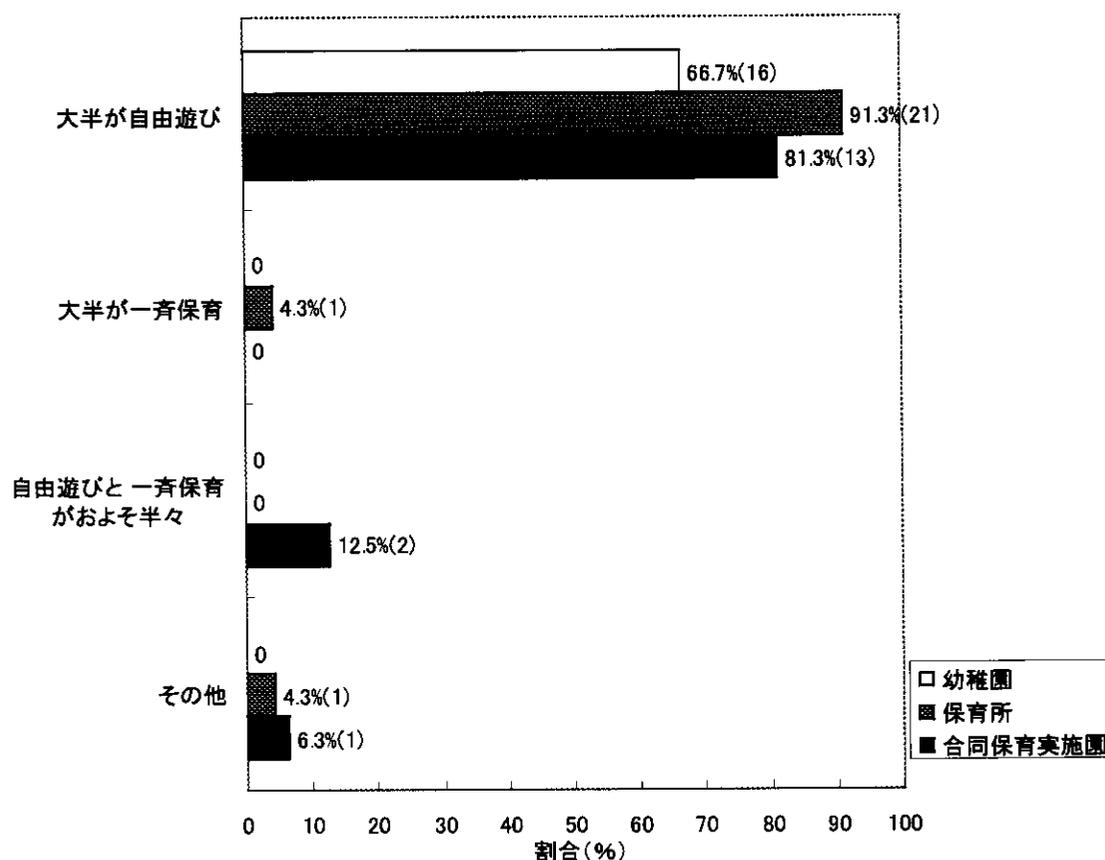


図13 早朝保育の保育形態 (複数回答)

「早朝保育で配慮していること(複数回答)」は、図14の通りである。70%以上の回答を得たものをみると、合同保育実施園と保育所は同じ項目であった。つまり「保育者は子どもの体調に留意している」合同保育実施園81.3%(13園)、保育所91.3%(21園)、「登園してきた子ども一人一人に必ず声をかけている」合同保育実施園81.3%(13園)、保育所100.0%(23園)、「保育者は全体を見守るようにしている」合同保育実施園75.0%(12園)、保育所である。73.9%(17園)となっている。幼稚園ではいずれの項目も65%未満であり、上記の項目は、順に62.5%(15園)、54.2%(13園)、50.0%(12園)となっている。60%台の項目をみると、合同保育実施園では「たたみ・じゅうたん・ソファーなど、子どもがくつろげるスペースを設ける」68.8%(11園)が挙げられているが、これは保育所では52.2%(12園)、幼稚園は16.7%(4園)である。保育所で60%台の項目は「登園時にその日の子どもの状況などについて、親と必ず会話を交わしている」65.2%(15園)だが、合同保育実施園では43.8%(7園)、幼稚園では12.5%(3園)のみである。

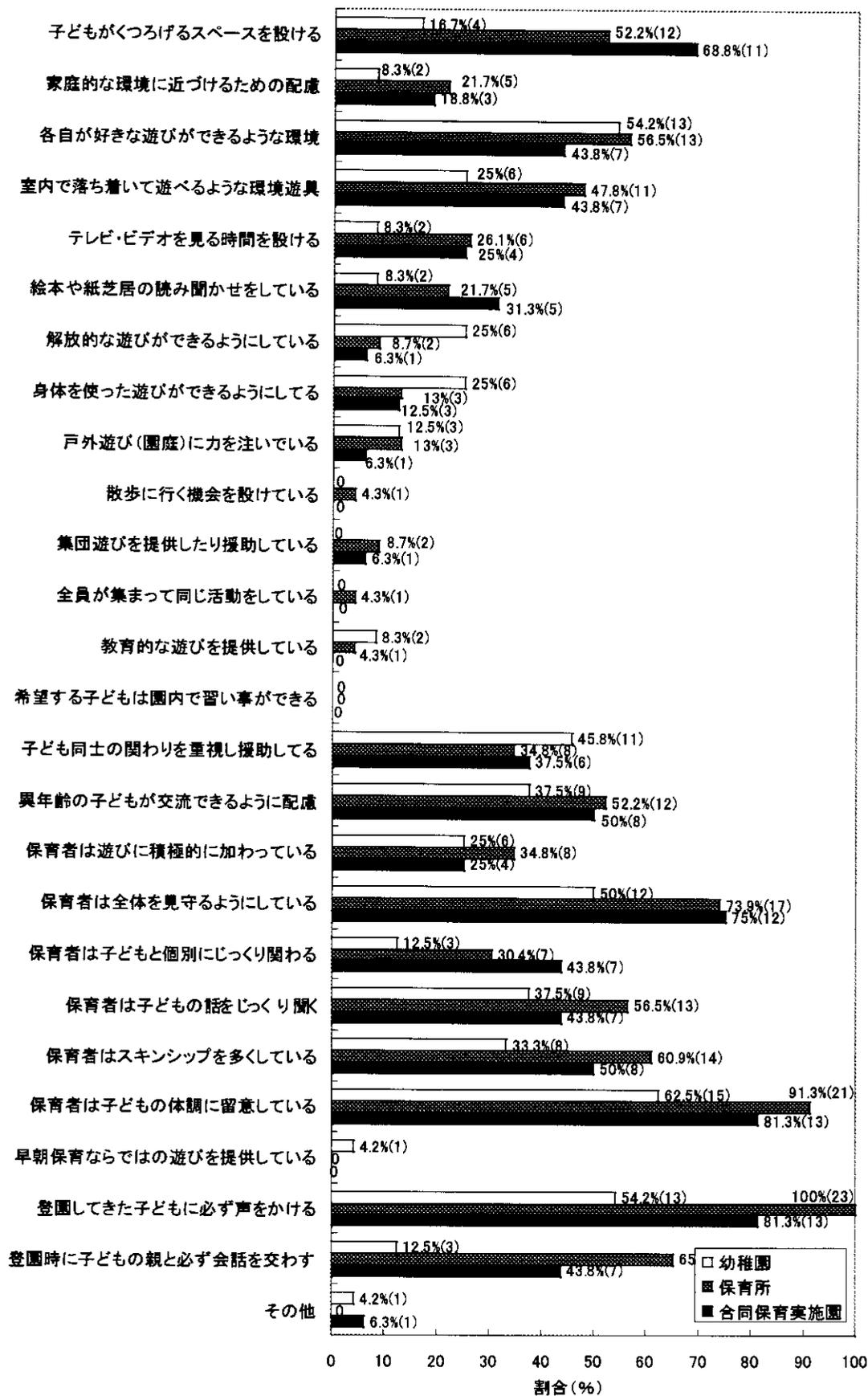


図14 早朝保育で配慮していること

③午前中の保育

午前中一緒に活動している子どもの数を尋ねたところ、平均人数が、合同保育実施園で60.5人、保育所は22.2人、幼稚園は49.6人であった。この時の保育者の平均数は、合同保育実施園3.6人（うち常勤保育者3.3人）、保育所は1.6人（うち常勤保育者1.6人）、幼稚園は4.0人（うち常勤保育者4.3人）であるから、保育者1人当たりの子ども数は、合同保育実施園16.8人、保育所13.9人、幼稚園12.4人となる。合同保育実施園では集団規模がかなり大きい傾向にある上に、保育者1人当たりの子どもの数も3つの施設の中で最も高いといえよう。

午前中保育の保育形態は図15のとおりである。「自由遊びと一斉保育が半々」がいずれの施設種別でも半数強を占めており、合同保育実施園56.3%（9園）、保育所56.5%（13園）、幼稚園54.2%（13園）である。次に合同保育実施園では「大半が自由遊び」37.5%（6園）、幼稚園20.8%（5園）だが、保育所は8.7%（2園）にとどまっている。保育所で次に多いものは「大半が一斉保育」であり、30.4%（7園）となっている。これは合同保育実施園では6.3%（1園）のみであり、幼稚園では16.7%（4園）である。

午前中の一斉保育の開始時刻をみると、合同保育実施園10.0時、保育所9.7時、幼稚園10.0時となっている。その最小値は、合同保育実施園、保育所ともに9.0時、幼稚園は8.5時だが、最大値、つまり最も遅くに開始される場合は、保育所は10.3時、合同保育実施園と幼稚園は11時となっている。つまり、全体的に見ると、保育所と比べて合同保育実施園と幼稚園は一斉保育の開始時刻が遅い傾向にあるといえよう。なお、合同保育実施園では「一斉保育の時間がない」という園が12.5%（2園）ある。

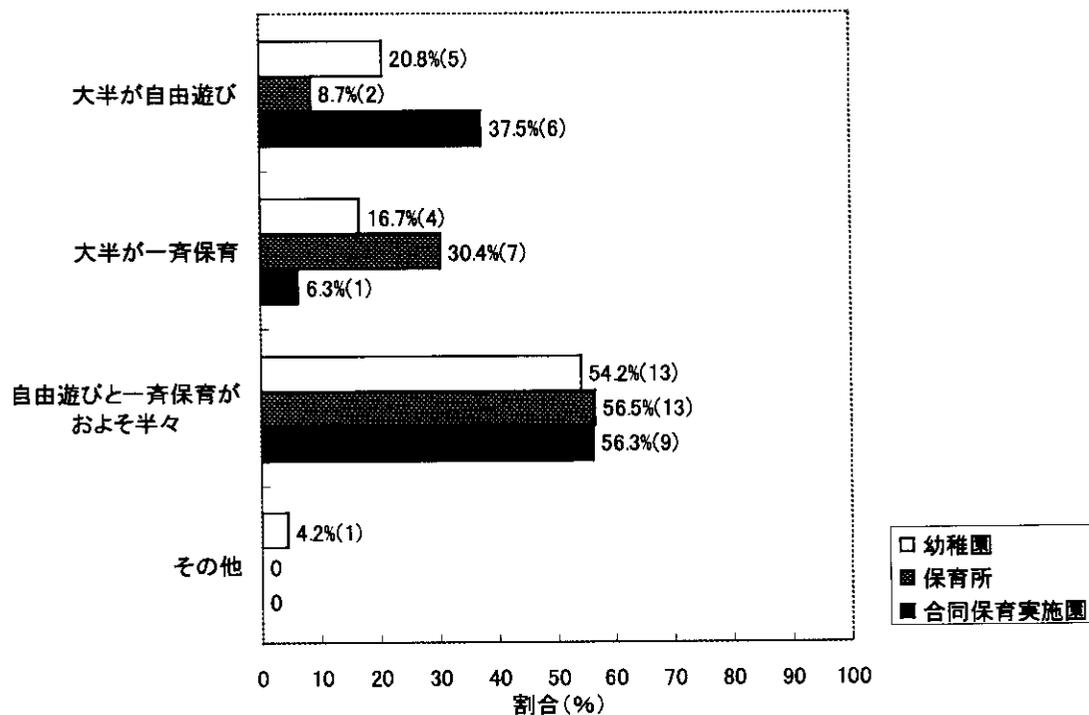


図15 午前中保育の保育形態

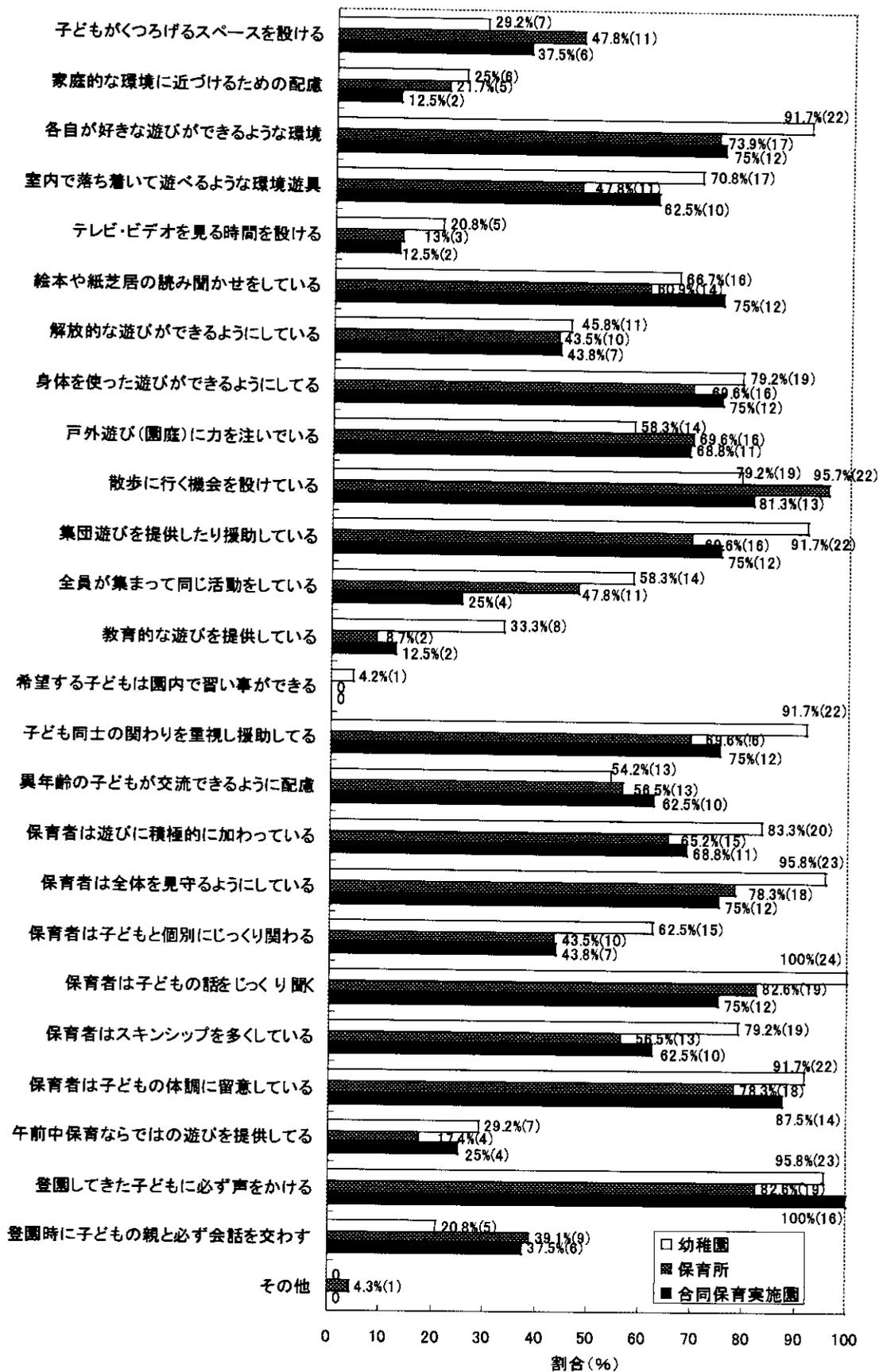


図 16 午前中保育で配慮していること (複数回答)

「午前中保育で配慮していること」は、図 16 の通りである。合同保育実施園で 80 % 以上の回答を得たものは、「登園してきた子ども一人一人に必ず声をかけている」100.0% (16 園)、「保育者は子どもの体調に留意している」87.5 % (14 園)、「散歩に行く機会を設けている」81.3 % (13 園) となっている。

保育所では「散歩に行く機会を設けている」95.7 % (22 園)、「保育者は子どもの話をじっくり聴いている」82.6 % (19 園)、「登園してきた子ども一人一人に必ず声をかけている」82.6% (19 園)」となっている。

幼稚園では、「保育者は子どもの話をじっくり聴いている」100.0% (16 園)、「保育者は全体を見守るようにしている」95.8 % (23 園)、集団遊びを提供したり援助している」91.7 % (22 園)、「各自が好きな遊びができるように環境を整えたり援助している」91.7 % (22 園)、「子ども同士の関わりを重視している」91.7 % (22 園) となっている。

④ 午後の保育

午後の保育では、幼稚園は 3 園のみの回答であり、ここでの分析から除外することとする。

午後 4 時の時点で 5 歳児が一緒に活動している子どもの数を尋ねたところ、平均人数は、合同保育実施園で 32.8 人、保育所は 25.7 人となっている。この時の保育者の平均数は、合同保育実施園 3.3 人 (うち常勤保育者 2.8 人)、保育所は 2.8 人 (うち常勤保育者 2.7 人)、である。保育者 1 人当たりの子どもの数は、合同保育実施園 9.9 人、保育所 9.2 人、ある。

午後の保育形態は、図 17 の通りである。いずれの施設も「大半が自由遊び」が最も高くなっているが、数値には差異があり、合同保育実施園 68.8% (11 園)、保育所 39.1% (9 園) となっている。「自由遊びと一斉保育がおおよそ半々」が次に高く、前者 25.0 % (4 園)、後者 30.4 % (7 園) となっている。

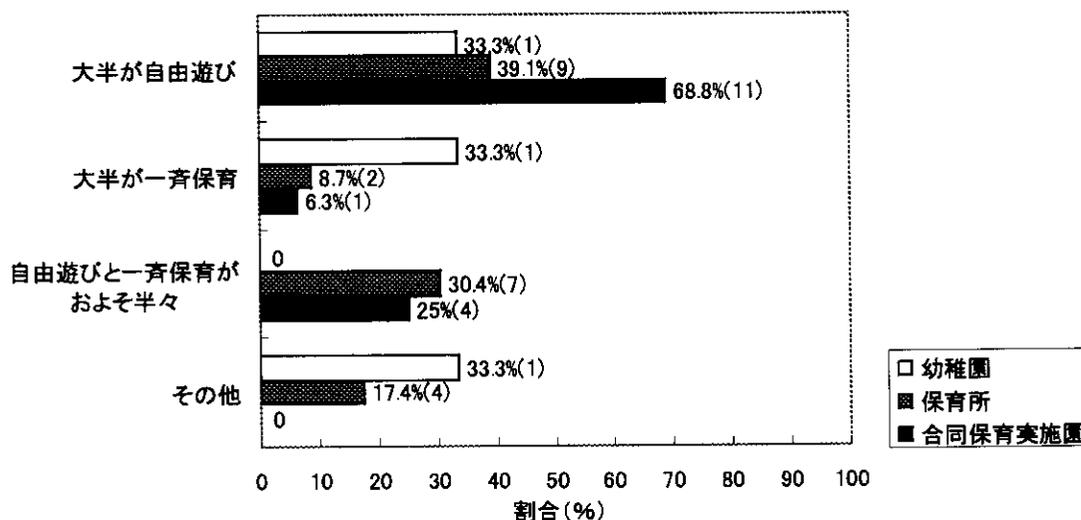


図 17 午後の保育形態

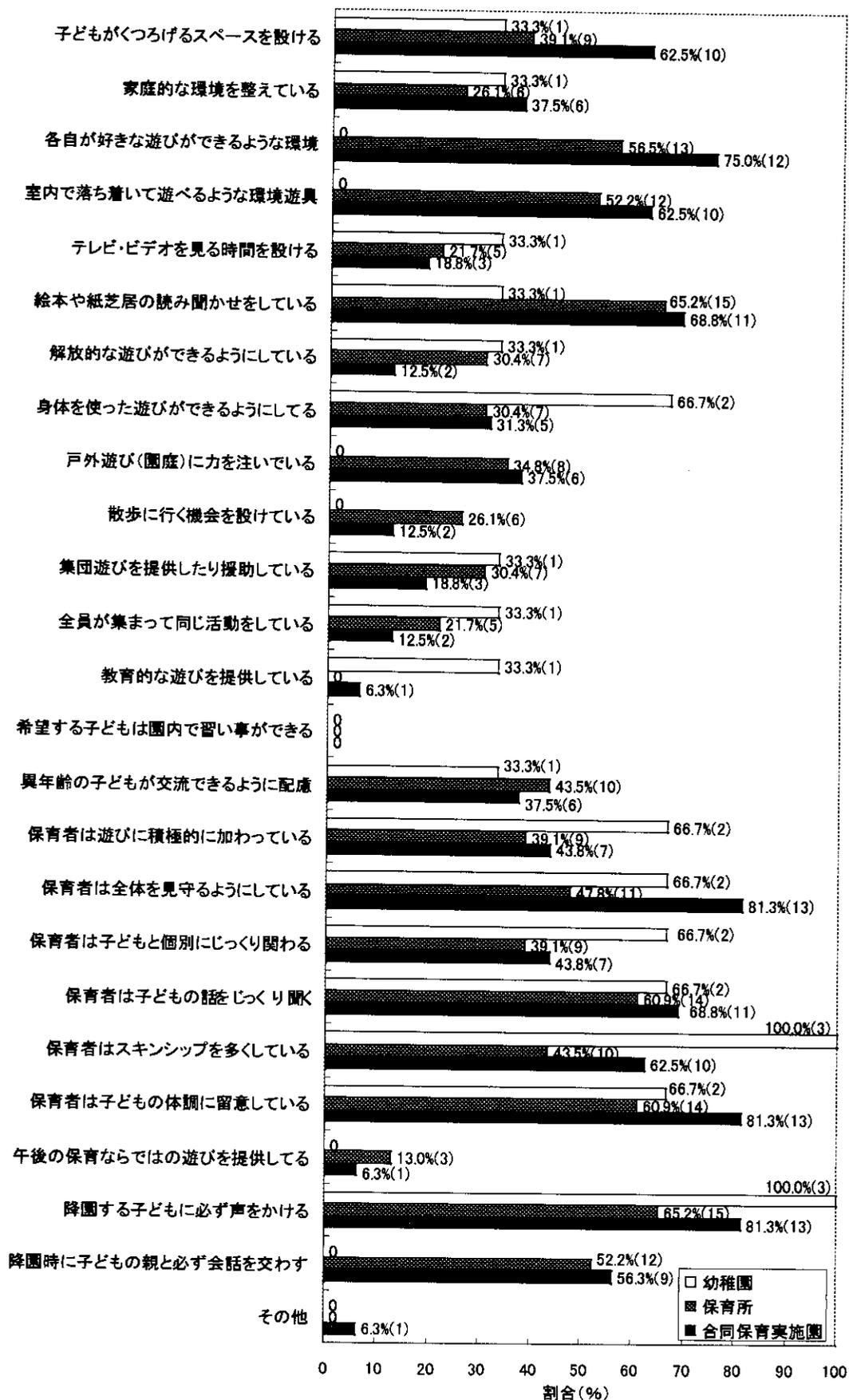


図18 午後の保育で配慮していること (複数回答)

「午後の保育で配慮していること」は、図 18 の通りである。合同保育実施園について回答率の高い項目をみると、「降園する子ども一人一人に必ず声をかけている」81.3 % (13 園)、「保育者は子どもの体調に留意している」81.3 % (13 園)、「各自が好きな遊びができるように環境を整えたり援助している」75.6 % (12 園)となっている。

保育所では「降園する子ども一人一人に必ず声をかけている」65.2% (15 園)、「絵本や紙芝居の読み聴かせをしている」65.2% (15 園)、「保育者は子どもの体調に留意している」60.9 % (14 園)、「保育者は子どもの話をじっくり聴いている」60.9 % (14 園)、の順となっている。

⑤午後6時以降の保育

午後6時の時点で5歳児と一緒に活動している子どもの数を尋ねたところ、平均人数は、合同保育実施園で 11.0 人、保育所は 6.5 人となっている。この時の保育者の平均数は、合同保育実施園 3.0 人 (うち常勤保育者 1.4 人)、保育所は 1.0 人 (うち常勤保育者 2.7 人)、である。保育者 1 人当たりの子どもの数は、合同保育実施園 3.7 人、保育所 3.6 人である。なお、幼稚園は 0 となっている。

午後6時の保育形態は、図 19 の通りである。「大半が自由遊び」となっており、一斉保育の時間があると回答した園は無い。なお、「その他」と回答した園は、「6時以降はおやつを食べ、ゆったりする。テレビ、ビデオを見る」などとしている。

「午後6時以降の保育で配慮していること」は、図 20 の通りである。合同保育実施園について回答率の高い項目をみると、「降園する子ども一人一人に必ず声をかけている」88.9 % (8 園)、「保育者は子どもの話をじっくり聴いている」88.9 % (8 園)、「保育者は子どもの手をにぎったり、抱いたりなど、スキンシップを多くしている」77.8 % (7 園)となっている。

保育所では「降園する子ども一人一人に必ず声をかけている」57.1 % (4 園)、「保育者は子どもの話をじっくり聴いている」42.9 % (3 園)、「保育者は子どもの手をにぎったり、抱いたりなど、スキンシップを多くしている」57.1 % (4 園)、「保育者は子どもの体調に留意している」57.1 % (4 園)、の順となっている。

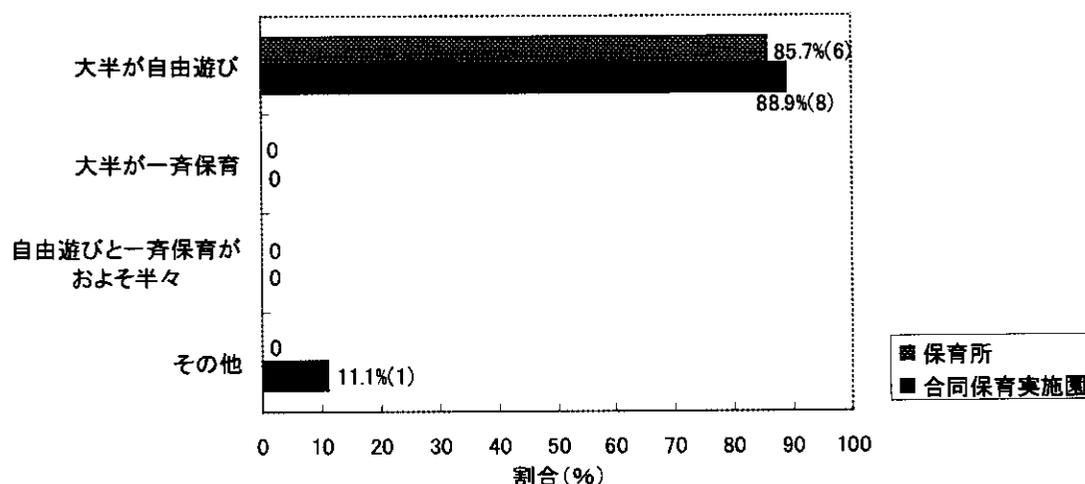


図 19 午後6時の保育形態

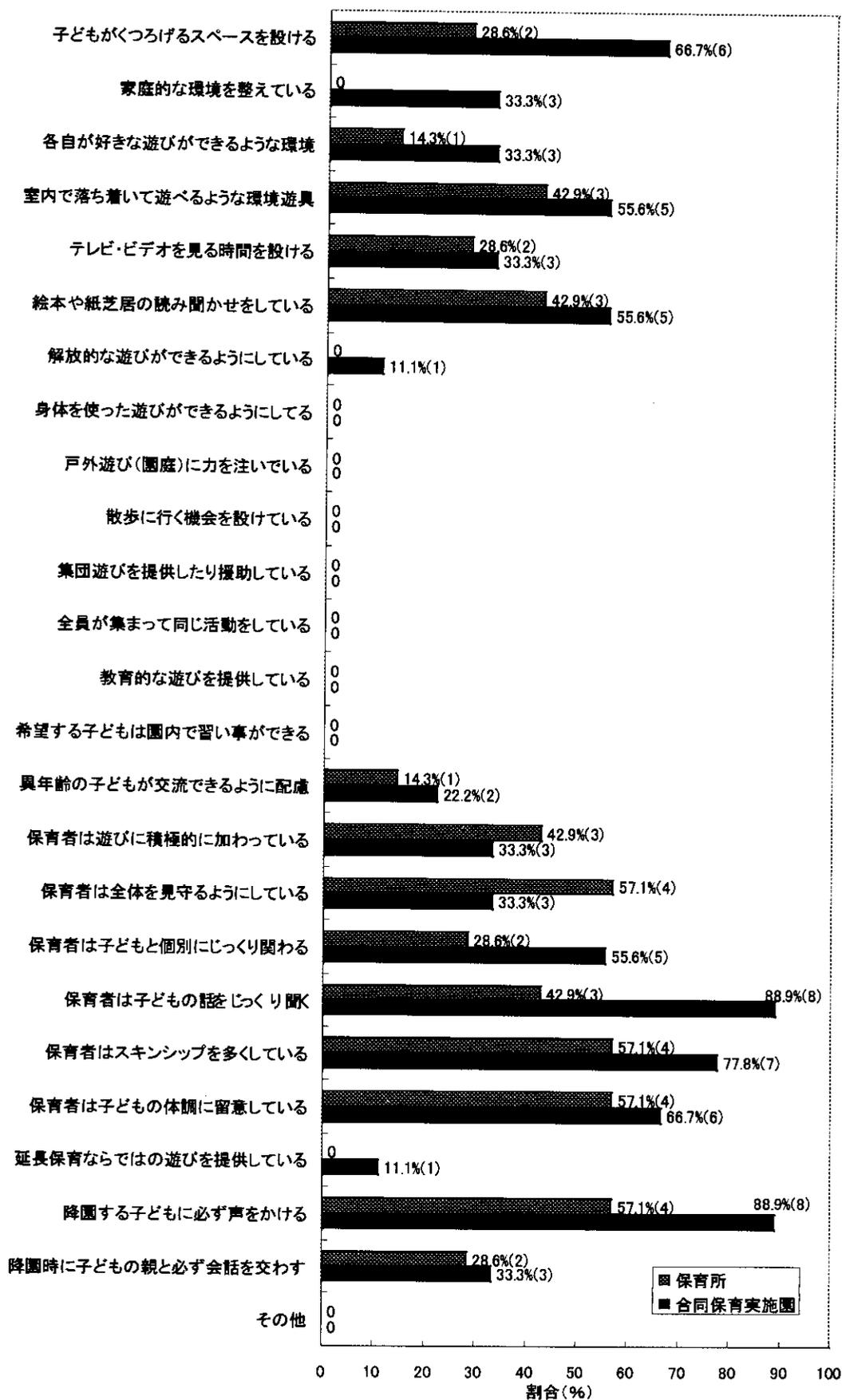


図20 午後6時以降の保育で配慮していること (複数回答)

②幼稚園児降園時の保育園児の心境

1) 保育者の意見

保育者に「幼稚園児が先に降園することについて、保育園児はどのように感じていると思われますか (C票-Q10)」と尋ねたところ、図36の結果を得た。

「1.寂しい」「2.やや寂しい」を合わせると46.8%、「3.影響はない」34.2%、「5.ほっとする」「4.ややほっとする」を合わせると3.6%である。保育園児が「寂しい」と感じている保育者が、「影響はない」とする保育者を上回っている。

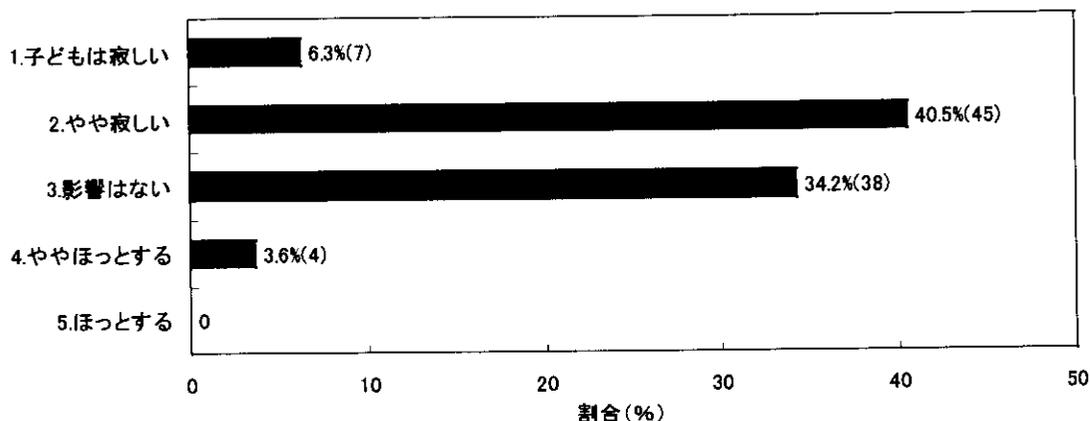


図36 幼稚園児降園時の保育園児の心境 (保育者の意見)

2) 保護者の意見

保護者に同様の質問 (D票-Q9) をしたところ、図37の結果を得た。

「1.寂しい」「2.やや寂しい」と回答した者を合わせると46.0%、「3.影響はない」46.0%、「5.ほっとする」「4.ややほっとする」と回答した者を合わせると2.0%である。

保育園児が寂しいと感じている保護者と、影響はないと感じている保護者は約半数づつに意見が分かれている。

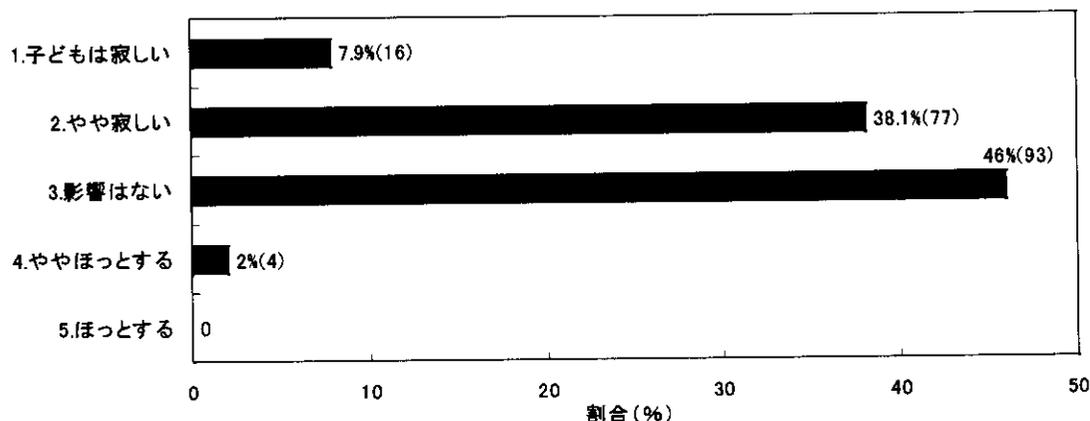


図37 幼稚園児降園時の保育園児の心境 (保護者の意見)

3) 保育園児の情緒に影響を及ぼすファクター

これを表2 (p 54 参照) の分析軸を用いてクロス分析をしたところ、グループ間に 20 ポイント以上の開きが見られた項目は、次の通りであった。つまりこの項目を幼稚園児が先に降園する際の保育園児の情緒に影響を及ぼすファクターと考えることができよう。

i. 幼稚園児の保育時間

保育者の意見について、幼稚園児の保育時間別 (分析軸 d) に保育園児の情緒との関係を分析した結果が図 38 である。「1.寂しい」「2.やや寂しい」と回答した者を合わせると、“早帰り型” 53.9 %、“預かり保育型” 30.8 %、“一体型” 30.0 %の順であり、“早帰り型” の園が“一体型” の園よりも 24 ポイント高くなっている。しかし「3.影響はない」をみると、“預かり保育型” 69.2 %、“早帰り型” 30.8 % “一体型” 25.0 %の順であり、“早帰り型” の園が“一体型” の園よりも 6 ポイント高くなっている。「5.ほっとする」「4.ややほっとする」と回答した者を合わせると“早帰り型” 5.1 %、“一体型” 0 %、“預かり保育型” 0 となっている。数値は低いが“早帰り型” に、「幼稚園児が帰ることで保育園児がほっとする」と感じる保護者がいることに注目する必要がある。

つまり、“早帰り型” の園では、保育園児は寂しいと感じてい保育者が半数を超えて最も高くなっているが、影響がないと感じている保育者や、逆に数は少ないが、幼稚園児が帰ることでほっとする保育園児もいると、保育者は考えている。この「保育園児はほっとする」と感じている保育者は、いずれも 1 クラス 21 人以上の園で保育所に所属している保育士である。そのうち半数は幼稚園教諭とは全く別の勤務体制を組んでいる園である。

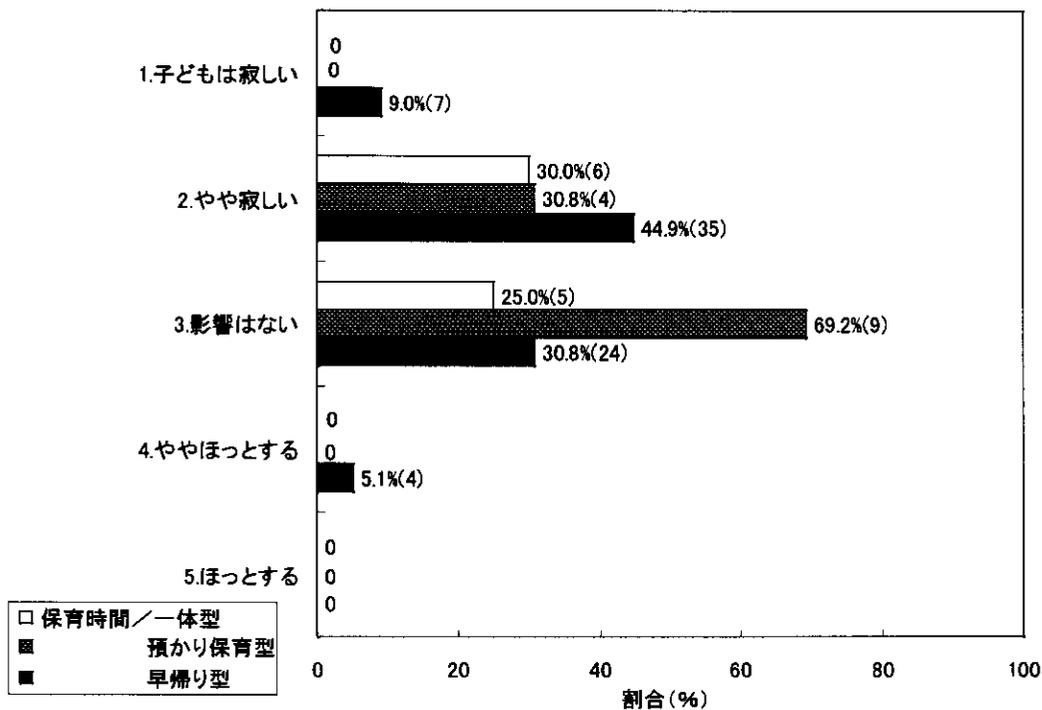


図38 保育時間別 (d) 幼稚園児降園時の保育園児の心境 (保育者の意見)

保育士自身も大規模集団から、自分の所属の保育園児のみとなることで、ほっとするのかもしれない。そのような保育士の心境が回答に反映されている、あるいは保育園児の心境に反映していることも考えられよう。

保護者の意見について、幼稚園児の保育時間別に保育園児の情緒との関係进行分析した結果が図39である。「1.寂しい」「2.やや寂しい」と回答した者を合わせると、“早帰り型” 51.1%、“預かり保育型” 44.4%、“一体型” 27.3%の順であり、幼稚園が常に早帰りする園が、“一体型”よりも24ポイント高くなっている。「3.影響はない」をみると、“一体型” 51.5%、“預かり保育型” 47.2%、“早帰り型” 44.4%の順となっており、保育園児と基本保育時間が一体の園が7ポイント高くなっている。また「5.ほっとする」「4.ややほっとする」と回答した者を合わせると“早帰り型” 2.3%、“預かり保育型” 2.8%、“一体型” 0%となっている。数値は低いが、やはり“早帰り型”に、幼稚園児が帰ることで保育園児がほっとすると感じる保護者がいることに注目する必要がある。

すなわち、“幼稚園児の保育時間”別に保育園児の情緒に与える影響についてみると、保育者の意見、保護者の意見ともに、幼稚園児の基本保育時間帯が保育園児と同様の8時間となっている“一体型”の園は、幼稚園児が常に昼食後まもなく(13時30分～2時)降園する“早帰り型”の園に比べて、保育園児の情緒への影響が少ないと感じている者が多い。ただし、一方で「影響がない」という意見や、むしろほっとするという意見が少数であってもみられることに注目し、“早帰り型”の保育園児の気持ちは多様だと位置づけた方がよいかもしれない。

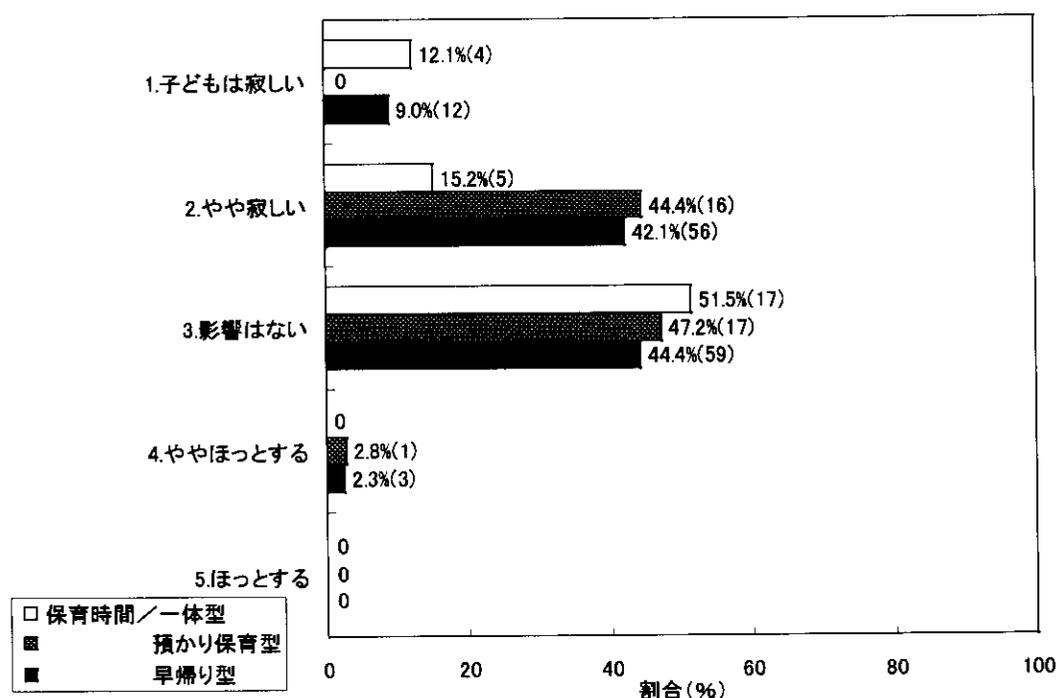


図39 保育時間別〈d〉幼稚園児降園時の保育園児の心境 (保護者の意見)

ii. 保育者の勤務体制

保護者の意見について、保育者の勤務体制別（分析軸）に保育園児の情緒への影響を分析した結果が図40である。「1.保育園児は寂しい」「2.やや寂しい」を合わせた数値をみると、「同一型」48.3%、「別々型」28.6%と、別々の勤務体制を組んでいる園が20ポイント高くなっている。「3.影響はない」をみると、「同一勤務型」43.2%、「別勤務型」57.1%と、別々の勤務体制を組んでいる園が14ポイント高くなっている。「5.ほっとする」「4.ややほっとする」を合わせた数値を見ると「同一勤務型」1.7%、「別勤務型」14.3%と、別勤務型では幼稚園児が帰ることで保育園児がほっとすると保護者が感じている者が14%もいることは、注目すべきであろう。

すなわち、保護者の意見をみると、保育所保育士と幼稚園教諭の勤務体制が全く同様にローテーションを組んでいる「同一勤務型」の園は、両者が全く別々にそれぞれの保育者間で勤務を組んでいる「別勤務型」園に比べて、「保育園児が寂しい」という意見が多くなっている。

なお、保育者の意見では保育者の勤務体制による明確な相違はみられなかった。

「同一勤務型」の方が保育園児が寂しいと感じるのは何故であろうか。同一勤務型であれば、子どもが少なくなる午後は保育者がローテーションで勤務し、クラス担任が保育する機会は少なくなる。このような担任保育者との関係が、保育園児の心境に反映すると考えられる。

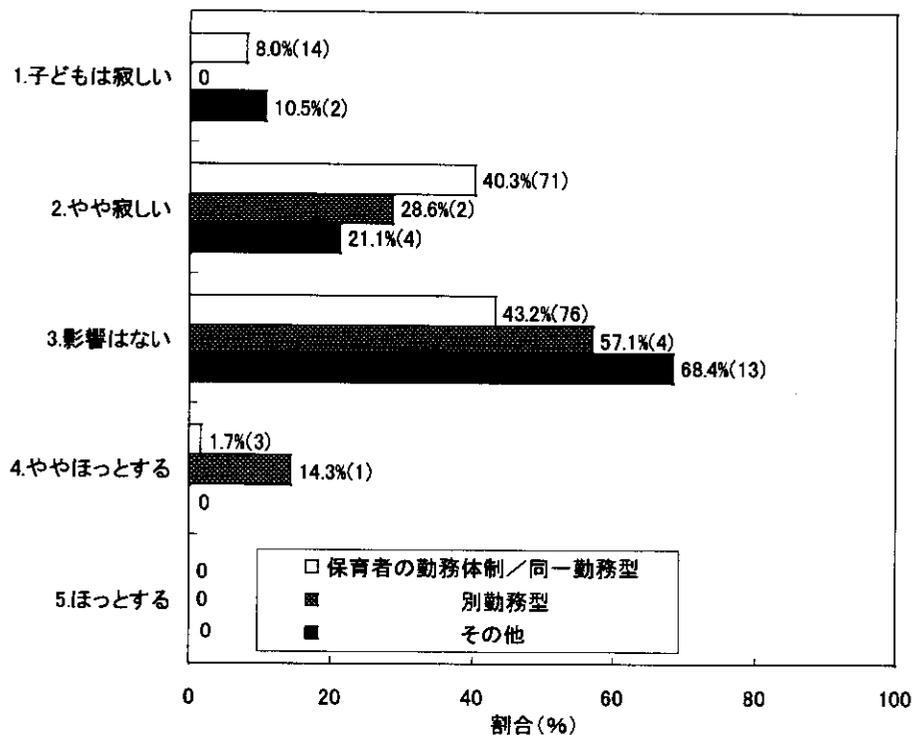


図40 勤務体制別（e）幼稚園児降園時の保育園児の心境（保護者の意見）

iii. 地域の特性

保護者の意見について、園の所在する地域の特性別に子ども同士の関係を分析した結果が、図 41 である。「1.寂しい」「2.やや寂しい」と回答した者を合わせると“都市化” 55.8%、“過疎地” 33.3%であり、“都市化”が“過疎地”に比べて 23 ポイント高くなっている。「3.影響はない」は、“過疎地” 47.2%、“都市化” 37.2%であり、“過疎地”が“過疎地”に比べて 10 ポイント高くなっている。逆に「5.ほっとする」「4.ややほっとする」と回答した者を合わせると、“過疎地型” 0%、“都市化型” 4.7%となっている。

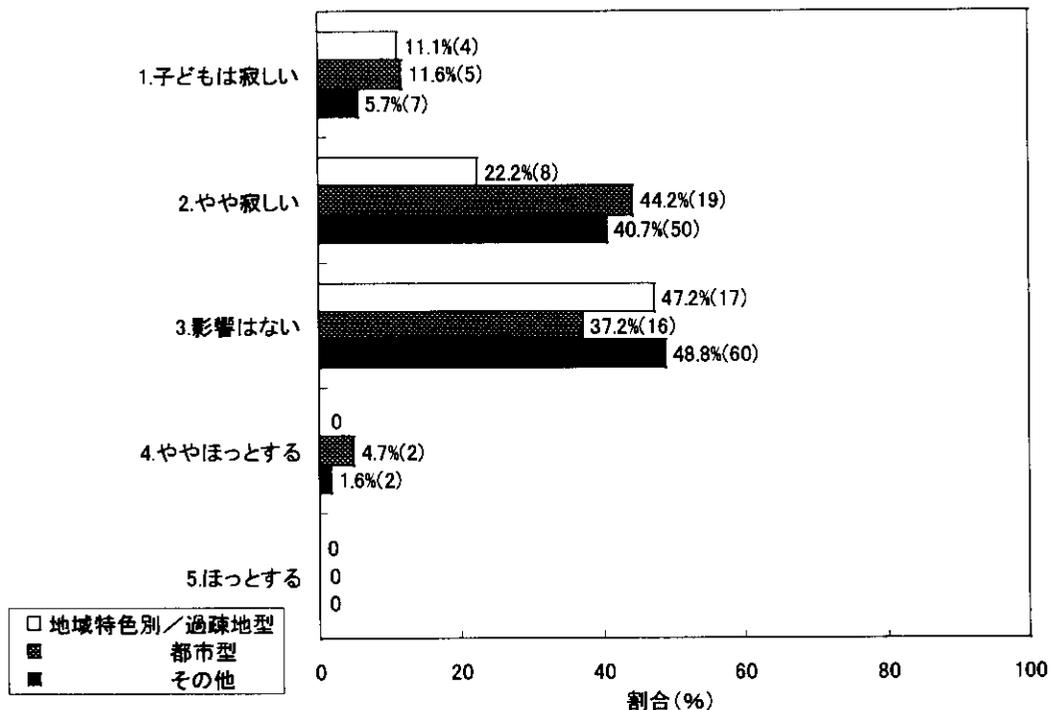


図41 地域特性別〈f〉幼稚園児降園時の保育園児の心境（保護者の意見）

保育者の意見について同様に分析した結果が、図 42 である。明確な差異はみられないが、同様の傾向がうかがえる。「1.寂しい」「2.やや寂しい」と回答した者を合わせると、“都市化” 52.0%、“過疎地” 43.3%であり、“都市化”が“過疎地”に比べて 9 ポイント高くなっている。「3.影響はない」は“都市化” 40.0%、“過疎地” 23.3%であり、やはり“都市化”が“過疎地”に比べて 17 ポイント高くなっている。「5.ほっとする」「4.ややほっとする」と回答した者は、“過疎地”“都市化”ともに 0%である。

すなわち、保護者の意見では、“過疎地”の園は、近年新たに人口が流入し待機児が多い地域である“都市化”の園に比べて、「幼稚園児の降園時に、保育園児に寂しさなどの情緒的影響を与えることは少ない」という意見が多くなっている。

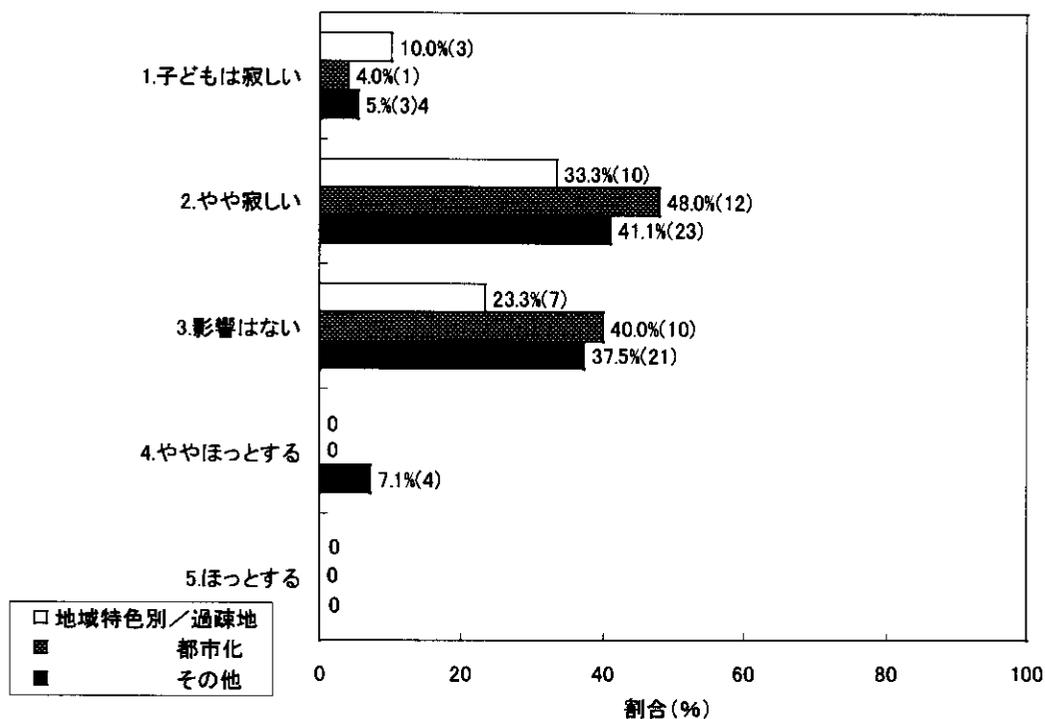


図 42 地域特性格 (e) 幼稚園児降園時の保育園児の心境 (保育者の意見)

4) 幼稚園児降園時の保育園児に対する配慮

保育者に「幼稚園児が降園するときに、あなたは保育園児が寂しいと感じないように配慮していますか (C票-Q11)」と尋ねたところ、図 43 の結果を得た。

「1.配慮していない」「2.どちらかといえば配慮していない」を合わせた数値は 9.9 %、「5.配慮している」「4.どちらかといえば配慮している」を合わせた数値は 55.8 %であり、これについてもやはり半数強が配慮していると回答している。

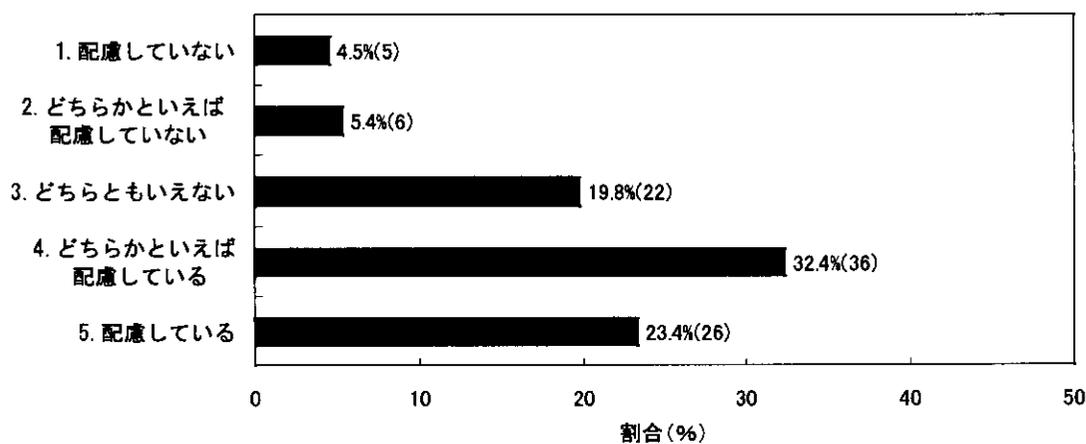


図 43 幼稚園児降園時の保育園児に対する配慮 (保育者の意見)

自由回答をみると、その内容は次のようなものとなっている。

資料2 幼稚園児降園時の保育園児に対する配慮（具体的内容）

- 幼稚園児の降園時間前に、保育園児と幼稚園児を分離する。
（保育園児の目の前で幼稚園児が降園しないようにする）
- 午睡前や午後の活動を充実させて、楽しく過ごせるようにする。
（保育園に残るという意識を持たせない。）
例／・午睡前…お話・絵本・紙芝居など
・おやつ…バイキング
・午後…ゲーム、友達同士の遊び・散歩・午前中にできない活動・午前中と違う遊具
- 異年齢児と交流する。（ゆったりとした、家庭的な雰囲気の中で保育をする。）
- 言葉かけや関わりを密に接し、て安心して過ごせるようにする
- 降園時間が違う理由（母親が働いていること）を子どもにわかりやすく話し、納得できるようにする。
- 子どものうらやましい、寂しいなどの気持ちを早めに汲み取り、言葉かけをする。
例／「子どもの寂しい気持ち、つまらない気持ちはよくわかるので、その気持ちをよく汲んだ上で、当然のこととして受け入れる」
「子どもの側にたった、思いやりのある、わかりやすい言葉を使う」
- 子どもに前もって「母親が働いているから長時間保育なのだ」ということを理解させておくことを、家庭にお願いしている。
- いろいろな家庭があることを知らせる。
- 自分が園に来ることの意味を知ったり、親が迎えに来るまで、皆で楽しく園で過ごそうという気持ちを持たせるように接する。

しかし、一方で、子どもは気にしていないし、特別な配慮は必要ないという意見もある。例えば、次のような意見があった。

「昔はいろいろと気遣いをしていたが、子どもはそんなに気にしていないことがわかり、ふつうにしている。」「特に配慮しなくても、影響はない」

③幼稚園児の夏期休暇が保育園児に及ぼす影響

1) 保育者の意見

保育者に「夏休みに長期間休む子どもと、休まない子どもがいることは、休まない子ども(保育園児)にどのような影響があるとお考えですか。(C票-Q22)」と尋ねたところ図44の結果を得た。

「1.気になる影響がある」「2.やや気になる影響がある」と回答した者を合わせると45.0%、「3.特に影響はない」37.8%、「5.良い影響がある」「4.やや良い影響がある」と回答した者を合わせると4.5%である。つまり、保育園児に気になる影響があると感じている保育者が、影響はないとする保育者をやや上回っている。

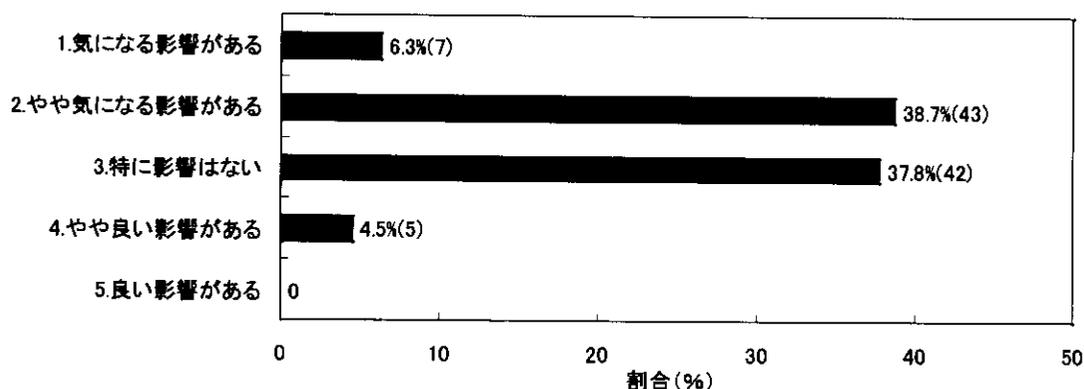


図44 幼稚園児の夏期休暇が保育園児に及ぼす影響 (保育者の意見)

2) 保護者の意見

保護者に同様の質問(D票-Q10)をしたところ、図45の結果を得た。

「1.寂しい」「2.やや寂しい」を合わせると50.5%、「3.特に影響はない」41.1%、「5.ほっとする」「4.ややほっとする」を合わせると1.5%である。

保育園児が寂しいと感じている保護者が半数強で、影響はないと感じている保護者をやや上回っている。

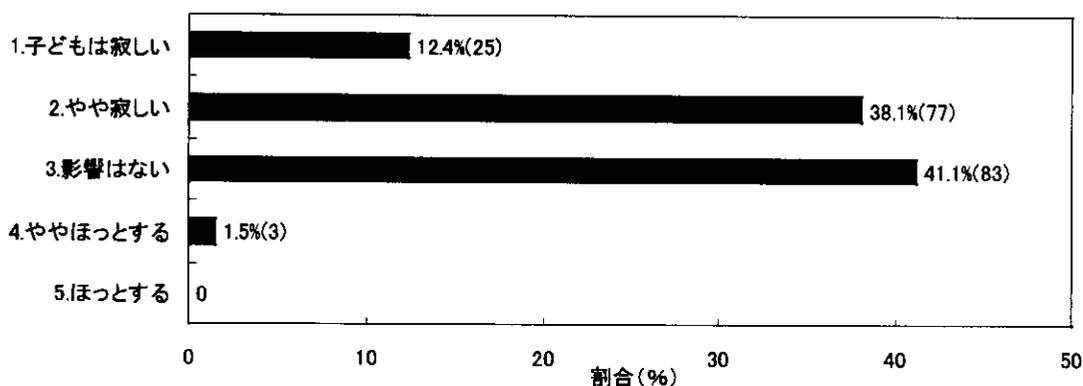


図45 夏期休暇中の保育園児の心境 (保護者の意見)

3) 保育園児に影響を及ぼすファクター

これを表2 (p 54 参照) の分析軸を用いてクロス分析をしたところ、グループ間に20ポイント以上の開きがみられた項目は、次の通りであった。つまり、この項目が保育園児の情緒に影響を及ぼすファクターとして考えることができよう。

i. 集団規模

保育者の意見について、在園児の人数別(分析軸a-1)に保育園児への影響を分析した結果が図46である。「1.気になる影響がある」「2.やや気になる影響がある」を合わせた数値をみると、“200人以上”64.3%、“100~199人”44.8%、“100人未満”36.7%と、集団規模が大きくなるほど気になる影響がある、という意見が増加している。

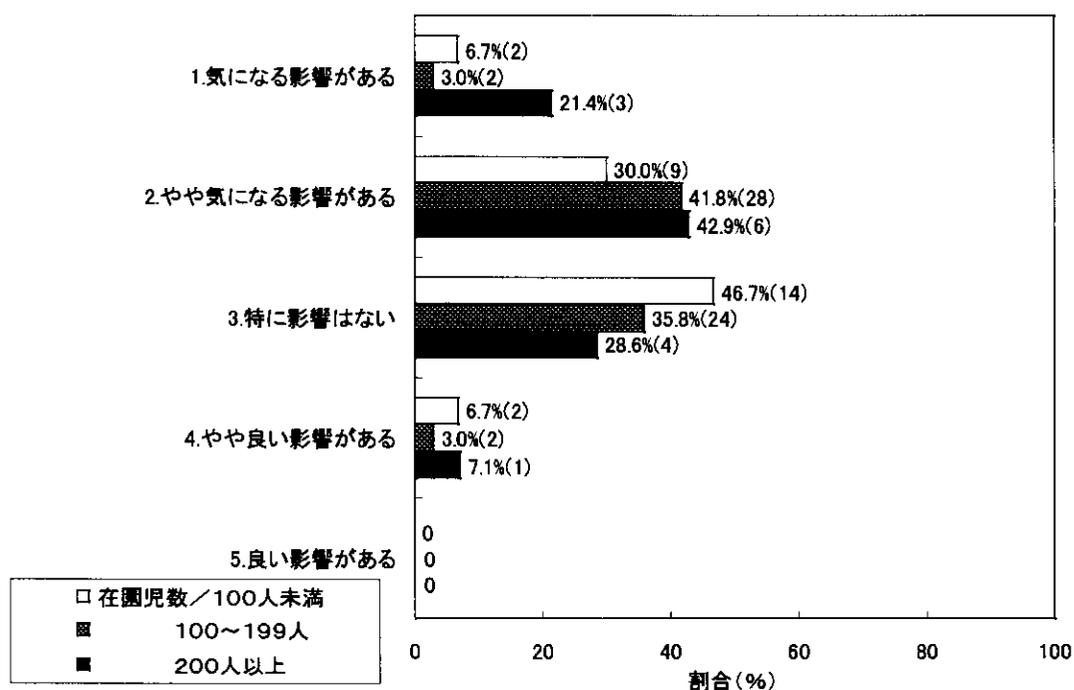


図46 在園児の人数別 (a-1) 夏期休暇が保育園児に及ぼす影響 (保育者の意見)

また、5歳児を含む1クラスの人数別(分析軸a-2)に夏期休暇が保育園児に及ぼす影響を分析したものが、図47である。「1.気になる影響がある」「2.やや気になる影響がある」を合わせた数値をみると、“31人以上”57.7%、“11~20人”40.7%、“21~30人”41.3%と、集団規模が大きくなるほど気になる影響がある、という意見が増加している。

保護者の意見について、5歳児を含む1クラスの人数別(分析軸a-2)に保育園児の心境を分析したものが図48である。「1.気になる影響がある」「2.やや気になる影響がある」を合わせた数値をみると、“31人以上”51.4%、“21~30人”50.5%、“11~20人”48.4%と、ほぼ同数だが、「集団規模が大きくなるほど気になる影響がある」という上記の結果に反しない傾向となっている。

すなわち、保育者の意見をみると、規模が大きくなるほど幼稚園児が夏休みの際に保育園児に「気になる影響が見られる」という意見が多くなっている。保護者の意見においても、明確な差異はみられないが、同様の傾向がうかがえる。

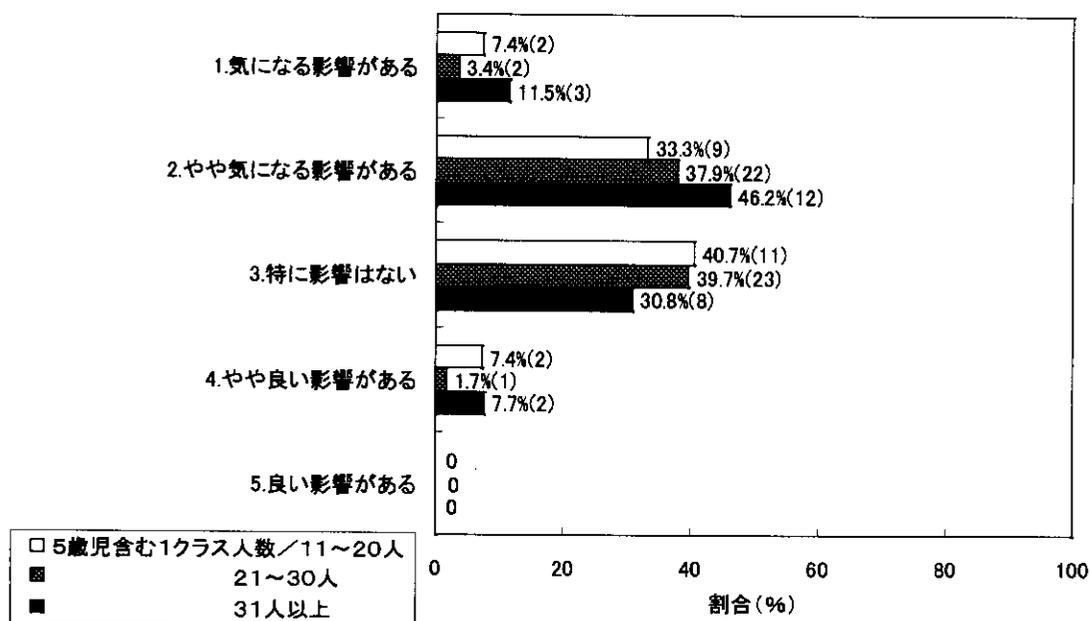


図47 1クラスの人数別（a-2）夏期休暇が保育園児に及ぼす影響（保育者の意見）

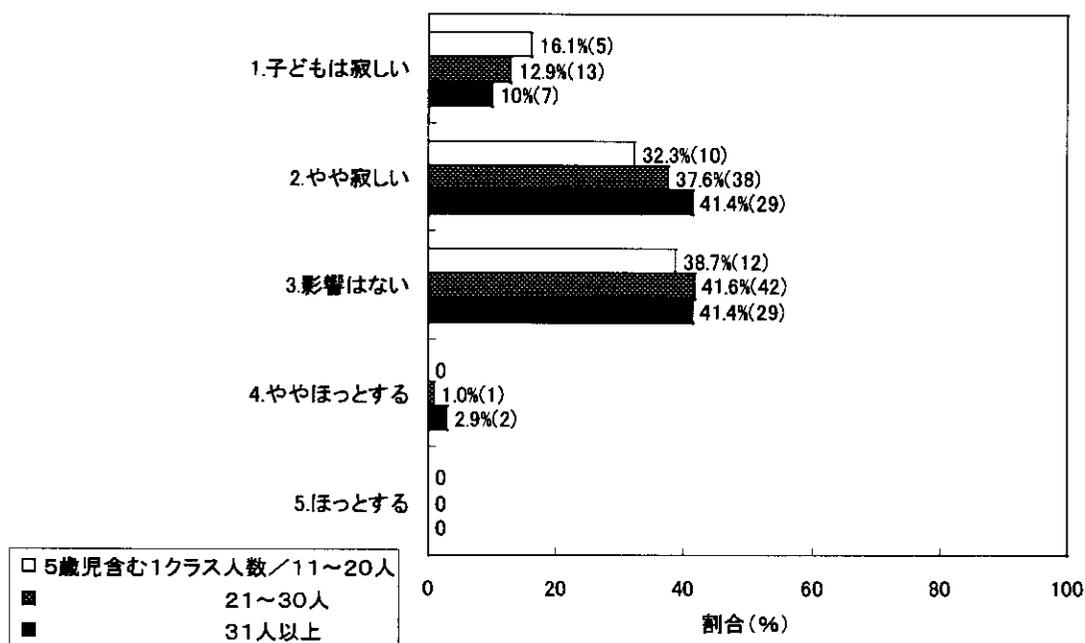


図48 1クラスの人数別（a-2）夏期休暇中の保育園児の心境（保護者の意見）